

会議の名称	令和4年度第5回茅野市総合計画審議会		
開催日時	令和5年2月9日(木) 18時30分～20時40分		
開催場所	茅野市役所 議会棟大会議室		
公開・非公開の別	公開・非公開	傍聴者の数	0人
議題及び会議結果			
発言者	協議内容・発言内容(概要)		
事務局	<p>○議事</p> <p>1 開会</p> <p>2 会長挨拶</p> <p>3 副市長挨拶</p> <p>4 協議事項</p> <p>(1) 第6次総合計画の構成案について 資料1</p> <p>5 閉会</p> <p>○議事録</p> <p>1 開会</p>		
会長	<p>2 会長挨拶</p> <p>きょうの審議会では文章化されてきた基本構想についてご意見をいただき。この2月でコロナが流行を始めて丸3年となり、閉塞感の漂う生活面での制限が恒常化しているが、政府は行動制限の解除に動き出そうとしている。第6次総合計画もアフターコロナに対応した、言い換えれば、時代の変化に対応した市民に寄り添った計画にしなければならない。先日、市民アンケートを見返してみたところ、生活しづらくなった、人とのふれあいの機会が減った、将来に希望が持てないといった意見が多くあった。今日検討いただく基本構想も、市民の気持ちに寄り添ったものにしていきたいと思っている。ここで、今日のテーマにも関わるが、地域創生総合戦略のテーマである「若者に選ばれるまち」の意味について少し考えてみたのでお話ししたい。ベルビアの中に今から20年前に作ったCHUKO らんどチノチノという子どもの居場所がある。私はここの大人サポート委員長ということで開設当初から携わっているが、当時を思い返すと2つの目的があった。1つは多感な時期に子供たちにいろいろな経験をしてもらいたいという教育的観点、もう1つは小さいころに楽しい原体験をしてもらうことで、いつかはまた戻ってきてほしいというまちづくりの観点であった。当時茅野市は全国に先駆けて中高生の居場所を作り、今では当たり前だが、音響の整備された音楽室、ブレイクダンスもできるレッスン場を完備している。当時はまだ教育関係の方から否定的な意見をいただいたことも記憶している。私は外部から若者を呼び込むことも良いが、茅野市に生まれ育った若者がふるさとに帰ってくるような施策がどうしても必要ではないかと感じている。いろいろな考え方があるので、本日の審議会でも皆さんの忌憚のないご意見をいただきたい。本日もよろしくお願ひします。</p>		
副市長	<p>3 副市長挨拶</p> <p>コロナ禍において我々は様々な課題、社会の歪みのようなものを経験し</p>		

	<p>た。一方で、社会や地域のつながりが分断されたことで、やはり人や地域と繋がってほしいという価値も改めて確認したのではないかと思う。今後コロナが5類になって、社会活動がより活発になるが、再認識した価値をどのように実現していくかが大切になる。6次総においても地域の中で何が大切なのか、どのような価値を残していくのか、新たに作り出していくのかということをしっかり議論して共有していく必要がある。そして、共有した価値を実現していくためにどのような政策・施策を作っていくかという体系を組み立てて実行していくことになる。今日はその入り口となる大きなまちづくりの考え方について、忌憚のないご意見をいただき、考え方を共有していきたいと思う。本日はよろしくお願ひします。</p>
事務局	<p>4 協議事項 (1) 第6次総合計画の構成案について 資料1 =企画係主査が説明=</p>
会長	<p>(I はじめに について) 1 総合計画とは、2 計画の構成・計画期間、3 計画策定の視点については、これまでの議論も踏まえてこういうことでよろしいか。4 計画策定の前提となる社会背景についても、社会経済情勢の変化、人口減少・超少子高齢化の進展、多発化・深刻化する自然災害のところはこれまで整理してきた内容であり、認識としてはよろしいか。 次のDXのところと、GXのところについては、少しピンとこないというか、具体的に何をしていけばいいのかわからない気もする。委員の皆さんの意見もいただきたいが、委員の感想はいかがか。</p>
委員	<p>デジタルと聞くとどうしても難しかったり、今までのIT化といった流れのことが意識されてしまうところだが、実際はいろいろなものを効率化したり、整理をして、より人と人がきちんと触れ合えるようにしようということが目的ではないかと思っている。手段はデジタルであるがトランスフォーメーションというのは、もっとやり方をよくしようということだと思う。あまり固く考えずに、仕組みが変わると、人が少なくなった分だけコミュニケーションが濃くなって、もう少し良い関係性が保てるのではないかということだと思う。</p>
会長	<p>次のGXのところについてお感じになっていることはあるか。</p>
委員	<p>GXの前に今のDXに関しては、昨年度国土形成計画の中間報告が出ているが、その中で地域生活圏という概念で、地域の関係者がデジタルを活用して自らデザインする新たな生活圏が地域生活圏である。地域生活圏の実現により、全国の様々な地域で人々が安心して暮らし続けられるようになり、個人と社会全体のウェルビーイングやSDGsが掲げる持続可能な社会の実現に繋がっていく。そのために必要な取組は、官民共創、デジタルの徹底活用、生活者・事業者の利便の最適化、横串の発想、ということが言及されている。まさに茅野市が今、これを計画に盛り込むことは時宜を得たものだと考えている。 次の地域循環共生圏だが、ここに書いてある通りだが、農山漁村の自立分散型社会と都市の自立分散型社会との関わり、関係人口といったことに</p>

委員	<p>も関わってくるが、自然資源、生態系サービス、食料、水、木材、自然エネルギー、水質浄化、自然災害の防止などに関してお互いに支え合うというもの。加えて、資金、人材なども提供して、エコツーリズムや自然保全活動への参加、地域製品の消費、社会経済的な仕組みを通じた支援、あるいは地域ファンドなども生まれ得る。これは環境循環型社会生物多様性白書 2021 年版でしっかりと書かれている。地域循環共生圏の形成に向けた GX の推進、と GX がついているが、GX を通じて地域循環共生圏の形成を目指すということも理にかなっているのではないかと思う。</p> <p>誰も取り残さない社会を実現するために、デジタルが苦手な世代を取り残さないようにするということ、すなわちアナログという言葉を入れてもらいたい。デジタルとアナログは対になった言葉だと思うが、デジタルを推進することで、人が少なくなった社会でもうまく回っていくとすれば、それと反対に、人がいないと回らない社会というものもしっかりともう 1 回見つめ直して、再構築していく必要がある。今のアナログだと、これからのデジタルに対応できない部分がたくさんあると思う。デジタルに対応できるアナログの部分ということも一言入れていただきたい。それと、デジタルというのはあくまでも道具であり、それを扱うのは人。人の力とか人のスキルとか、人間力みたいなものを高めていかないと、今のままで、デジタルに使われる人間が増えるだけになりかねない。操作したり考えたりするのは人間なので、教育や人材育成も必要。DX という言葉を中心に据えてもらっているが、アナログを再構築するということや、デジタルを使う人間の人間力を充実させるような意味の言葉を少し盛り込んでもらえると、より市民にとってわかりやすいものになるのではないか。</p> <p>GX のところは、6 ページの最後に自立分散型の社会とあり、自立はわかるが、分散型というのはどのような意味か。</p>
事務局	<p>分散というのは、東京一極集中という現状がある中で、東京と地方という 2 極構造ではなく、小さな共生圏を地方に分散させて複数つくるという意味でご理解いただきたい。</p>
委員	<p>都市の機能の一部を農村に分散させ、逆に農村の機能の一部を都市に分散させるという意味か。</p>
事務局	<p>都市と農村の機能分担という点は、共生という言葉で表現されていると考える。地方の都市と地方の農山漁村の共生圏を日本全国に分散させて複数作るという意味。</p>
会長	<p>この考え方において、茅野市は都市なのか、農山漁村なのか。</p>
事務局	<p>私見も含まれるが、都市としての役割を担うことがないとは言えないが、基本的には農山漁村に求められる役割への期待が大きいと考える。</p>
委員	<p>今の事務局の説明はその通りだと思うが、我が国の都市と農村との関わり、国土政策の視点から考えてみると、1960 年代には地域間格差が拡大していたため、農山漁村の都市化対策がいろいろと行われていた。ところが、1973 年のオイルショック以降、特に 90 年代になってくると、内発的</p>

	<p>発展論に立って個性的な地域が重んじられるようになってきた。それが1990年代半ば、バブル崩壊以降は、グローバル化も進む中で格差と分断は固定化され、都市と農村は共生していかなければならない、そのためには地域間の連携が必要だと言われている。その流れを踏まえても、地域循環共生圏、自立・分散型の社会という考え方は今回の計画に適しているのではないか。</p>
<p>会長</p>	<p>ありがとうございます。段々とわかってきたような気がします。DX、GXの部分はこれでよろしいでしょうか。</p> <p>続いて、最後の若者に選ばれるまちの推進について、いろいろなお考えがあると思いますが、アンケートなどを見ると若者にあまり良く思われていないと感じるところもある。この辺りについてはどのようにお感じか。</p>
<p>委員</p>	<p>ここは前提の話であって、認識としてはこれで良いと思う。</p> <p>いろいろなアンケートなどを見ると、若者にとって茅野市は不便で遊ぶ場所がないのだろうと思うが、そこを解消していてもマイナスがゼロになるだけで、幸せを感じることは難しい。ゼロからプラスになるようなことを若いうちに経験してもらい、茅野市であればこういったことができるんだ、という気持ちに一旦なってもらうことで、一度は出ていった若者にも戻ってきてもらうようにすることが必要だと思っている。プラスの部分というのは、子どもの時からまちづくりに関わることや、或いはDXやGXという分野は関わりやすいかもしれないし、公民館活動、いわゆるパートナーシップも子どものころから少しずつ関わるようにしていくことで形成されていくと思う。このあたりが施策の中にうまく取り入れていければ良いと思う。</p>
<p>会長</p>	<p>若者に茅野市に対する愛着を持ってもらえないことには、居付いてもらうことは難しい。個人的にはそのための施策は必要だと思う。</p>
<p>会長</p>	<p>(Ⅱ 第6次総合計画におけるまちづくりの考え方 について)</p> <p>おそらく、Well-beingと交流拠点という言葉については、いろいろなご意見があるのではないかと考えているが、いかがか。</p>
<p>委員</p>	<p>Well-beingに関して、事務局の説明は理解するところ。要約すれば、我々茅野市民にとって真に豊かな生活は、人それぞれの価値観やライフスタイルに応じて様々な暮らしを自由に選択して、それを実現することによって得られる、ということであり、個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味する概念がWell-beingだ、ということよろしいか。</p>
<p>事務局</p>	<p>まさに委員にまとめていただいたイメージを持っている。人の幸せは一概には定義できない中で、人それぞれ、自分の自己実現を目指すことができるということが一番大切であると考えている。</p>
<p>会長</p>	<p>どうもありがとうございました。副会長と話をする中で「倖せ」という字を使う時もあるという話もしたところでして、やはり人それぞれ幸せは違うので、その辺りのところを踏まえた目標でなければいけないと思う。</p>

	<p>交流拠点については、私はこれでいいだろうと思ったが、前回の審議会では、交流拠点には疑問を呈する意見もいただいた。私なりに考えてみたところ、違和感の理由としては、交流拠点という言葉のイメージが5万人規模の茅野市に合っているのか、ということと、長野県内でもリニアの駅を作っているが、そういった交流のイメージを持ってしまうことが理由ではないかと感じた。家に帰ってから考えてみたが、茅野市は縄文の時代には、日本を代表する交流拠点であったのではないかと思いついたことで、私とすれば違和感はなくなった。第3次総合計画にも交流拠点という言葉があったが、あのときは別荘の方と地元の方の交流や、将来的には20万人都市を作りたいというような思いも含まれていた言葉だったと思う。今回は少し違う意味で交流拠点という言葉が使われている。これがキーワードであると思うので、私たちはもちろん、一般市民の方もよく理解しないと、なかなか計画として浸透していかないと思う。交流拠点についてはご意見ないか。</p>
委員	<p>確かにここの記載だけでは十分に理解できるかわからないが、総合計画の中では、たくましい、やさしい、しなやかなという3点が大切で、行き交う人たちの拠点となることを目指しているということで理解した。この段階ではここまでしか書かれていなくても良いと思う。この先の基本計画の中で、もっと詳しくこれを掘り下げていくと市民の方もわかりやすくやるのではないかと思うので期待している。</p>
委員	<p>交流拠点と Well-being は、今回の総合計画の重要なキーワードだと思う。たくましく、やさしい、しなやか、ということは茅野市がずっとやってきたことなのですから理解できると思う。Well-being を実現するためにはやはり自己実現、プラスの幸せのような部分が必要で、茅野市が交流拠点であることで情報や知識、経験等が集まりそれが蓄積されて Well-being が実現できるというストーリーは非常に良いと思う。ただ、茅野市がそうなれるということは、他のところでも通じるのか、という点は、やはり差別化していかなければいけないと思っている。茅野市ならではの部分は非常に大事だと思う。交流拠点にしても、別荘の人が多いか首都圏から近いとか、公立諏訪東京理科大の学生もいるとか、パートナーシップとか、公民館活動とか、DX、GX、SDGs もそうだが、そういったことをただ重ねるだけではなくて、それらが合わさることによる相乗効果のようなところが書けると良い。それができれば2つの言葉も生きてくると思う。</p>
会長	<p>私も個人的に悩んだところで、交流拠点という言葉以外に何を使ったらそれを表せるかと考えてみたがなかなか見つからなかった。人と人との交流ということで考えると、ふれあいといった言い方もできるが、ふれあい拠点というと、ふれあいの丘のような介護施設を想像してしまった。茅野市の交流拠点は、もっと違った意味の交流拠点であるべきだと思うので、それは基本計画の中で、反映して欲しいと思う。</p>
委員	<p>繰り返したが、やはり Well-being という言葉は、市民にとって身近でわかりやすい言葉とは思えない。あえて横文字を使わないで、何か違う言葉を考えて方がいいと思う。</p>

副会長	<p>交流拠点というのはいろいろな人種の人や老若男女がいろいろなことで交流していく拠点になっていくっていうことで良いと思う。これから検討するところでは茅野市のアイデンティティが求められる。どこの行政でも使うような言葉の羅列にならないことを期待している。</p> <p>私も最初は Well-being とは何なのかと、とても引っかかった。ただ、今は本当に大きな転換期に差しかかっている、価値観も変化してきている。今回は幸せという言葉にフューチャーして総合計画を検討している中で、幸せという言葉は、まずそれ自体、自分の中で取り組みにくい言葉だと思った。個々の幸せというのは本当に多種多様であり、本当は自分らしく心豊かであるとか、皆さんが広い視野をもって意味を捉えてくれればいいのだが、逆に幸せという言葉からイメージしやすい様々な固定観念に縛られてしまう可能性もあるのではないかと。そうなるのであれば、私は Well-being という新しい言葉を使うのもまた新たな視野が広がるのではないかと考えている。私は SDGs という言葉が出たときも、なぜそんな言葉を使うのだろうと思った。今、Well-being という言葉は本当にいろいろなところで使われている。Well-being という言葉を茅野市なりに総合計画の中で表せていけるのであれば、一つの選択肢としてこれから新しい視野が開けていくのではないかと考えている。</p>
委員	<p>Well-being にしても、新たな交流拠点にしても未来の構想のことを考えているわけだが、DX については令和 4 年 4 月にはデジタル田園健康特区に区域指定されて動き出しており、市民の方たちにもわかりやすい部分だと思ったので、私自身がもう少し理解させていただきたいと思った。資料には、区域指定されたことを受け既存の規制緩和とあるが、これは医師法を緩めることができ、看護師さんの職務領域が増えるという意味にとっているが、それでよろしいか。</p>
事務局	<p>委員がおっしゃったとおり、デジタル田園健康特区に指定される時に構想を立てており、その中では訪問看護師の役割の拡大や薬剤などの自宅への搬送など、従来の規制の中ではまだできない領域を少しでも緩めていって、利用者とそのご家族、そしてまた医師そして看護師、それぞれの負担を軽減することを目指している。</p>
委員	<p>誰が聞いてもイメージしやすい話だと思う。自分が今困っていること、または自分の周りの人が困っていることを改善できそうな話だと感じた。それから、自治体間連携を前提にとあるのは、茅野市の場合は、諏訪 6 市町村のことを指しているのか。</p>
事務局	<p>ここで言う連携は、デジタル田園健康特区に指定された、岡山県吉備中央町、石川県加賀市、それから茅野市が、それぞれ掲げた規制緩和項目のために事業を進め、またそれを連携することで、より良いサービスの提供などを考えていくということが前提にある。その中で、将来的には近隣市町村とも連携ができれば良いと考えているところ。</p>
委員	<p>デジタル技術を活用することで、今まで解決に至らなかった地域課題が解決に導かれる可能性が広がってきていると言うからには、何か一つ、二</p>

事務局	<p>つ、イメージできるようなことが既にあるのか。</p> <p>今まで暮らしの中で困っていたことや手間がかかっていたことについて、デジタルを活用して解決したり、省力化したりすることを考えている。その具体的な内容については、市民の方々と一緒に、何から手をつけるか検討しているところであり、現在策定している DX 基本計画の中である程度の方向性が示せる予定。</p>
委員	<p>交流拠点についてはこの言葉でいいのではないかと思う。人、モノ、金、情報が集まる場所にしたいという思いもあるし、それと先ほどもあった 20 万人都市という話は、やはり茅野市だけではそういったことはできないと思うので、諏訪地域の近隣市町村とも交流しながら、生活圈や産業圏を作っていくという意味で非常に良い言葉だと思う。</p> <p>次に、若者に選ばれるまちづくりということで、そのためには自己実現や自己成長をすることが幸せに繋がるということなので、やはり交流拠点の中でいろいろな産業、仕事を通じて自己実現できるまちであってほしいと思う。</p> <p>それと、目指すまちの将来像、たくましくやさしいしなやかな、というのは、語呂がいいのでこの順番なのか、それとも第 1 にたくましく、を重要視しているのか、なぜこの順番なのかについて教えてほしい。</p>
政策監	<p>市長と話をする中で、茅野市が大切してきたものは何か、という話が出ました。今後も茅野市が大切してきたものを守って、そして発展させていくことが必要だと考える中で、たくましくなければ、やさしさが守れない、しなやかでなければやさしさが守れないのではないかと考えている。今まで築き上げてきた福祉 21 や、パートナーシップのまちづくり、医療と介護、福祉が連携した地域包括ケアシステムといったものが住民の力で守られてきた、支え合いの伝統があるまちであるので、これが続くためにもたくましさと、しなやかさが必要だと考えている。順番の先後はないので、そのあたりはご議論いただければ良いと思う。</p> <p>それと先ほど委員からご指摘があったように、今、自己実現できていないものを自己実現するという意味合いもあると思いますが、交流拠点というのは手段であって、この交流拠点から生み出される価値が、たくましさ、やさしさ、しなやかさであるということではないかと考えている。茅野市のオリジナリティとして、今まで茅野市はどうやってたくましさを、やさしさ、しなやかさを生み出してきたのかというバックグラウンドを書き込む必要があるように思う。幸せというのは、ゴールがあるわけではなく、人それぞれの価値観に基づいているものだと思うが、幸せを永遠に求めるための運動論が必要であり、そのエンジンとなるものが交流ではないかということをして市長と話している。DX や GX については、世界の裏側と瞬時に繋がる時代においては、やはりこの地域の価値観だけで閉じこもってはいけないという意味も持っている。</p> <p>その中で、幸せという言葉が良いのか、Well-being という言い方が良いのかという点は、この地域の皆さんの感覚としてどちらが良いのかということもあると思うが、先ほど申したように、DX や GX のようにもはや世界と結びついて良いものを取り入れて、経済的にも文化的にも精神的にも家庭的にも、グレードアップしたまちをつくっていくためには、Well-being</p>

副市長	<p>という言い方がいいのか、委員の皆さんに十分議論をいただければと思います。</p> <p>政策監に続けて1点だけ。幸せなのか幸福なのかWell-beingなのかについては委員の皆さんが選ぶことだと思う。日本国憲法にも国民の権利として幸福の追求ということが書かれている。幸福の追求とは幸福そのものを保障するわけではないが、一人一人がそれぞれの幸福を追い求めるその土壌や条件の部分を保障するということであり、Well-beingを実現できるまちというのは、茅野市がそれぞれの人の幸福を追求できる場を用意していくということで、それが交流拠点のような舞台になってくるのではないかと考えている。</p>
委員	<p>茅野市のオリジナリティということで、若者に選ばれるまちとあるが、長野県の総合5ヵ年計画にある女性や若者から選ばれる県づくりとは関連性があるのか。</p>
政策監	<p>特に関係はない。総合戦略において若者に選ばれるまちをテーマにしたのも交流を求めていたのだと思う。若者は出て行ってしまっただけで戻ってこない、という消極的な意味合いだけではなく、若者が住んでみたい、このまちに住めば夢が実現できると思ってもらえるようなまちをつくるという意味が込められている。これを今、発展させて考えると、若者に来てもらって何を守りたいか、何を発展させたいのか、何を生み出すまちなのか、と考えたときに、たくましさ、やさしさ、しなやかさが生み出せる交流拠点であるべきだということだと思う。県も根源的には同じようなことを考えていると思う。地域間競争に負けないためには、やはり人が集まり、知恵が集まり、投資・財が集まる地域でなければ発展はないだろうと考えているのではないかと。</p>
委員	<p>国土交通省による地域との関わりについてのアンケートやライフスタイルの多様化と関係人口に関する懇談会などによると、3大都市圏の18歳以上の人口は4,678万人だったが、このうち約18%の860万人が関係人口として特定地域に継続的に訪問しているという結果が出ている。大都市圏内への訪問もあるが、大都市圏外でも約500万人が関わり持っているし、山の中のようなところでも50万人近くの人たちが定期的に来ている。人口減少社会において関係人口を獲得していくためにはこういった枠組を作り積極的に進めていくことが必要だと思う。関係人口が増加している要因には人々のライフスタイルの多様化や、関係確保の手段として情報通信技術が進化してきたことがあるが、これらを通じて地域やそこに住む人々との関係に意義を見いだす人が非常に多くなってきている。茅野市でもいろいろな取り組みをしてきているので、それを進化させて、交流拠点ということでやっていくことは意義があるのではないかと考える。</p>
委員	<p>(Ⅲ 基本構想 について)</p> <p>2番目の項目について、内容について異論はなく、きちんと押さえるべき内容は書かれていると思う。7ページのまちづくりのイメージにかなっている部分も十分にあると思うので良いと思うが、やはり稼げるとい言葉については、言葉として強いということもあるが、Well-being やSDGs</p>

	<p>などの観点でも、とにかくお金稼いで儲ければよいという時代ではなくなっていると思うので、少し齟齬が生じるのではないかと。経済的なことはとても大事なことで、それで人を集めたいということも非常によくわかるが、稼ぐことは良いが、時代に合った形で稼ぐということが含まれなければならない、幸せの定義と同様に、稼ぐというものをどのように定義するかということが絡んでくるので、実は難しい部分があると感じている。語呂がいいかどうかはともかくとして、私は、価値を生むというような言い方がいいのではないかと思う。稼ぐというのは結果として現れてくるもので、人の営みによって新しい価値や意味を生み出すということが中心にあった方がよい。そうするとSDGsの観点でもしっくりくるような気がする。加えて、成果の測定という視点があつたと思うが、何がどれくらい儲かったということや数字で測ることも大事だが、どのような価値を生んで、社会をどのように変えたかという測定の仕方も非常に大事だと思う。その意味でも、稼ぐということだとお金だけの単一的な成果指標になってしまう気がする。</p> <p>茅野市独自の観点かどうかということについては、皆さんがおっしゃっていることは非常によくわかる。茅野市の独自性があることはとても良いことだと思うが、私は反対の見方もあると思っていて、他の地域でもできるような形にしてあげるとするのはSDGsの観点でもとても良いことではないか。先ほどの自立・分散の話とも関係して、他と競争して奪ってきて茅野市だけがよくなるということではなく、それぞれの地域で形は違うかもしれないが、こういうやり方をしたら他の地域ももっと楽しく幸せに暮らせるのではないかと、という価値の提供を茅野市が先んじてやることはとても良いことだと思う。独自性はあるが汎用性もあるというやり方をこの中に含めるという意味では、稼ぐというよりは、価値を生むという観点で考えていくのが良いのではないかと思う。</p>
政策監	<p>まさにその通りだと思う。これからの地域間競争はマーケティングではなくブランディング。自立・分散型というのは、まさにその地域の価値をいかに上げるか、魅力を磨き上げるかということで、今後、本当に人が集まりたい地域というのは価値の高い地域であると思う。</p>
委員	<p>交流拠点と、たくましさ、やさしさ、しなやかさの関係がよくわからないので、そこがもう少し明確になるとよいと思う。たくましく、やさしく、しなやかなまちを目指したら交流拠点に自然になっていくのか、それとも条件なのか前提なのか、ということが自分の中で整理ができていない。基本構想は、やさしさ、たくましさ、しなやかさという視点だけで書かれているように見えるが、細かな文言の中には交流もあるようにも見える。7ページのイメージ図でも、市民同士が交流することと、外の人と交流することのどちらを表現しているのか、あるいは両方を表現しているのかもわからない。市民同士が繋がる、支え合うという言葉がありつつも、交流拠点というときも視線は外を向いている気がする。そのあたりがもう少しわかりやすくなるとよいが、基本的にはすごく良い内容になっていると思う。</p>
会長	<p>7ページのイメージ図の説明は基本構想の中でわかりやすく書かれているとよい。1安心して快適に暮らせるまちには、やさしさとたくましさ、</p>

委員	<p>2活力と魅力があふれる稼げるまちには、たくましさとしなやかさという2つの言葉が当てられているが、これらはすべて相乗効果があって、2つの言葉に限定はできないのではないかと思うのであえて書かなくても良いのではないか。</p> <p>11ページには森林の多面的機能について書かれているが、農業や農地の多面的機能についても少し触れてはどうか。今年の4月からは、農業経営基盤強化促進法が改正され、今までは農地法で、茅野市の場合は30アールの耕作地がないと農地を取得できないという下限面積が定められていたが、それが撤廃されることになっている。新たな人材が農業分野に増える可能性もあり、農業分野も変わっていくことが予想されるので、農業についても少し書いてはどうか。あるいは農林地の多面的機能といった形でまとめても良いかもしれない。</p>
委員	<p>私の家の近所にも家を建てて、自分が食べる分くらいは農業をしたいという方がいる。そういった方は農地を所有することができないので借りるしかないが、借りることも表立っては認められないという、今、委員がおっしゃった制限があるのが実情であった。規制が撤廃されれば多少の動きはあるのではないかと思う。すでに農業をやっている、続けていこうという人からすれば、今の規制についてはあまり影響がないと思う。昨今、田園都市という表現が使われているので、田園を仕事場とする身からすれば、そこにも目を向けてくれればうれしいと思う。</p>
委員	<p>この基本構想が完全に実施されれば、茅野市はとてもいいまちになると思うが、難しい部分もあると思う。先ほども会長がおっしゃっていたが、一つ目にはやさしさとたくましさ、2つ目にはたくましさとしなやかさという言葉が当てられているが、その関連性がわからない。</p>
委員	<p>ここまでの議論で、私としては非常に簡潔によくまとめられた、最上位計画にふさわしい大きな視野を持ったものになっていると思う。私としては3ページにある、総合計画は単なる行政計画ではなく、市民と行政が一緒になって実行する、というところが一番大事だと思っている。そのためには市民が理解していないといけなし、協働する仕組みや場がないとならない。茅野市の場合はこの点に関しては、以前からパートナーシップのまちづくりという手法を持っているが、いろいろなプランを策定して、それを実行して実現していくプロセスを考えると、策定段階からのパートナーシップについては今どうなのかと思う。以前私はある人に、いくつかの審議会に呼ばれて、何か意見を言ったとしても、それは市民の1人から意見を聞いたというただのアリバイにしかかかっていない、と言われて愕然としたことがあった。これに加えて、パブリックコメントといったようなプロセスをもって、市民の意見を聞いた、あるいは市民と一緒に策定したと言ってしまうのは良くないと思っている。以前はもう少し策定の最初の段階から市民を巻き込むということが行われていたはずだし、例えば、アンケート一つとっても、私が参加してきた会議ではメンバーがアンケートを作って実施し、その分析もメンバーと行政と一緒にやってきたが、そういったプロセスを最近あまり踏まなくなっているように思う。行政の政策立案力は非常に重要であるし、これからはそれが求められているとも思うが、</p>

	<p>ぜひ市民の皆さんと一緒に最初からやっていただけると良いと思う。このパートナーシップのまちづくりも、途中からはどちらかと言えば市民が政策立案して、行政がそれを事務局的にまとめて、形にしていくような関係性になりつつあったところなので、そこは市民側も反省しなければならない。こういうことに参加する市民というのは、行動する提言集団と言われてきたはずだが、提言どころか、文句を言うばかりで行動しない人たちも含まれてしまっていたように思う。自分事として考えて提言して、それに対して自分たちは何をすればいいのかということを考えられない人たちは、私の参加する会議では淘汰されてきている。実際に行動する提言集団であり続けることはなかなか大変なことだが、ぜひそういった人たちを集めて、一緒にやっていただきたいと思っている。私に関わっている会議では、若者に選ばれるまちということを受けて、茅野市の第3層4層5層のところで特に子どもに目を向けて、地域地区のおじさん、おばさん、おじいちゃん、おばあちゃんが、自分たちの身の回りにいる子どもたちをいかに楽しませて喜ばせるか、それによって自分もいかに幸せになれるかということに、各層の行政や保健補導員の方たちなどと一緒に取り組んできた。これこそが本当の公民協働ではないかと思っている。会長さんがかつてどんぐりネットワークでチノチノを提案されて、提案するだけではなく、自らその運営にずっと関わってこられたというのはまさに行動する提言者だと思う。この審議会に出席している方々も、この計画と一緒に考えている中で、自分には何ができるかということを考えているかどうか、自分自身に問わないといけないと思う。行政の皆さんはもちろん覚悟してやるわけだが、やはり議論に参加した市民も計画を背負っていくことを覚悟して、一緒に舞台上で検討して形にしていくことを楽しんでやっていけたら良いと思っている。</p>
<p>会長</p>	<p>今日は大変貴重な意見をたくさんいただいたので、この意見をベースにまた手直しをしていかなければならないと思っている。今後の日程について事務局から説明を。</p>
<p>課長</p>	<p>本日いただいたご意見を取り入れながら、もう一度見直しをかけて、できるだけ早く委員の皆さんにご覧いただきたいと考えている。基本構想についてはパブリックコメントも進めていかなければならないため、一旦素案という形にしたものをパブリックコメントにかけ、その結果についても委員の皆さまにご報告をしてご意見をいただきたいと思っている。これを3月いっぱいまたは4月頭ぐらいまで行いたいと考えているところ。また、次回の会議としては、総合計画審議会、行財政改革審議会、総合戦略有識者会議、DX推進協議会の皆さまにお集まりいただき、考え方を共有させていただくための合同会議を開催したいと考えている。3月14日火曜日を予定しているのでお願いします。</p>
<p>副会長</p>	<p>5 閉会 本日は様々な視点で、様々なご意見いただいたことで、計画も新しい表情を見せてきたのではないかとと思っている。引き続き議論を重ねることでさらに良いものになっていくと思う。それでは第5回茅野市総合計画審議会を終わりにします。ありがとうございました。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>

